様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 １０ 日現在

機関番号：３２６５７
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2014～2016
課題番号：２６５８００９８

研究課題名（和文）「教室文化論」に基づく教師養成活動の教育実践モデルとデータベースの構築

研究課題名（英文）Development of a practical education model on the basis of Theory on Classroom Culture

研究代表者
塩谷　奈緒子（SHIOYA, Naoko）

東京電機大学・理工学部・講師

研究者番号：１０４０９７６６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、「教室文化論」（塩谷、2008）を基に設計、実施される日本語教師養成クラスの実践データのデータベース化と教育実践モデルの構築を行った。具体的には、教室参加者（現職の教師・教師志望者）が教室における他者との対話的な語り合いを通し、自らの日本語教育観や教育理念を明らかにしていく教育実践の教室対話のデータベースを作成し、それを実践研究データとして質的に分析し、教室で語られる教師達の言語・文化・社会観や日本語教育観、および、そうした語り合いを生み出す教室対話過程・教室構造・教室環境作り（設計・支援）について明らかにした。

塩谷奈緒子（2008）『教室文化と日本語教育』明石書店

研究成果の概要（英文）：This study was designed on the basis of Theory on Classroom Culture (Shioya, 2008). It resulted in the compilation of a database using empiric data from an actual Japanese-language teacher training course and the development of a practical education model. Specifically, the database consists of classroom talk in practice, gathered as participants (current teachers and teachers in training) clarified their views on Japanese-language education and education principles through their interactive talk with others. This was qualitatively analyzed as empirical research data, shedding light on the teachers' views on language, culture, society, and Japanese-language education as it is spoken about in the classroom as well as on how to create (plan, support) a process for classroom interaction, a classroom layout, and a classroom environment that can generate such talk.

研究分野：日本語教育学

キーワード：教室文化　教室研究　教師論　対話

１．研究開始当初の背景

（１）日本語教育界では様々な教師養成・研修が行われているものの、そこでは日本語の「何」を「どのように」教えるかばかりが問題にされることが多く、「なぜ」それを教えるのか、「自分はどのような教育実践をめざすのか」という問題が検討されることは少ない。また、昨今、日本語教師のビリーフに関する調査や研究もなされるようになってきているが、それらは、一方向的な質問紙調査や二者間で行われるインタビュー形式で実施されることが多い。

（２）しかし、本来、教師は自らの言語・文化・社会・教育観等を基に教育理念を打ち立て（上記「なぜ」）、その目標に向けて教室設計と学習者支援を行い（上記「どのように」）、学習者や同僚と共にクラスを動的に作り出していく必要がある。しかし、現在、以上のようなプロセスを取り入れた教師養成講座はほとんどないのが現状である。

２．研究の目的

筆者は、2008 年から、大学院等の日本語教師養成クラスで、「教室文化論」（塩谷 2008）に基づく日本語教師養成の教育実践を行っている。それは、クラス参加者（教師）達が教室において、相互行為と自己内省を繰り返しながら自他の言語・文化・社会観、教育理念、教育目標等について対話し、他者との間で自分の日本語教育観を再構築し、自分の日本語教育活動を再構想していく活動である。しかし、こうした実践研究はまだ稀なため、本研究では、本教育実践を今後更に展開、公開していくための理論的枠組み・基盤を強化し、これまで行った教室実践のデータベース化を進めながら、これらを用いて本教育実践のモデル化を試みる。

３．研究の方法

（１）教室文化論に基づき行った過去の教育実践から、データベース化する録音データを選定し、文字化する。また、過去のデータに加え、新たな実践を行い、活動データを収集、文字化する。

（２）本研究に関連する理論、実践、研究手法（教師論・教師養成理論、教室文化論、実践研究論、質的研究法論等）を強化するための文献調査、先行研究分析を行う。

（３）上記（１）、（２）をもとに、実践研究データを質的に分析し、①教室で語られる教師達の言語・文化・社会観や日本語教育観、②そうした語り合いを生み出す教室対話過程・教室構造・教師の役割について明らかにし、本活動の教育実践モデルを構築する。

４．研究成果

（１）実践研究データの分析からは、教師の日本語教育観は、それぞれの言語・文化観、学習・教育観、教室内・外観、学習者・教師観、更に、仕事・社会・人間・人生観等と深く結びついており、それらは、それぞれの教師がこれまでどのような環境・社会の中で、どのような人々やものと出会い、自他とどのようにコミュニケーションを行って生きてきたかによって異なることが明らかになった。全ての教師にとって絶対的に「正しい」日本語教育の意味や方法はなく、それらは、個々の教師が、それぞれの未来に向けて、自分の背景や経験や自分自身の省察を通して自分で探し出していかなくてはならない。ただし、自分にとって、いわば当たり前、暗黙知である自分の考えを個々の教師が自力で切り分け、自己把握していくことは困難なことであり、そのとき不可欠なのが、自分とは異なる視点や経験を有する他者の存在であり、他者との「対話」である。

（２）本活動において行われる「対話」は、

「著者性」と「真正性」（佐藤学、1994、pp.17-24）を有する自立的かつ協働的な相互行為であり、「相互承認」（竹田 2004）を目指すものである。分析からは、それぞれの日本語教師の「世界」は、簡単に他者と一致するようなものではなく、「相互承認」は簡単に達成されることではないことが分かった。しかし、活動参加者たちが他者の考えに真剣に耳を傾け、深く考え、対話を重ねれば重ねるほど、参加者たちの考えの異なりが浮かび上がり、さまざまな考えや言葉が発せられる。他者の考えへの共感や違和感をもとに自分の考えを説明し、他者に問いかけ、他者からの問いかけに応答することによってこそ、それぞれの考えの輪郭や内容が浮き上がってくるのであり、対話によって新たなずれが生じることにより、更なる対話の必要性、可能性が生まれる。本活動で目指される対話とは、活動参加者の思想や認識の正当性やその優劣、勝ち負けを競うものではなく、対話を通して、教師達が自他の世界の固有で多様な意味や価値や背景を探し出し、その多様性と豊かさを共有し、それらを相互承認しようとする姿勢や態度であり、そうした自他の世界は、自分とは異なる他者との対話を通してこそ（再）発見されるということを具体的に体験、認識してもらうことである。

それぞれの日本語教師が有する（人間としての歴史に裏打ちされた）日本語教育経験、また、そこから描く日本語教育の目的、更に、それらの日本語教育観をもとに様々な現場・環境で行われる日本語教育実践は、多様で固有で豊かなものである。よって、教師間の対話の活動でも、それぞれの教師が、自他の「「意味の構成」＝「語り」＝「関係の編み直し」」を行いながら、自分の未来に向けて「経験の再構成」（佐藤、1995、p.72）を行っていくことが大切である。

（3）対話を介して、教師が自分の教育理念や自分の目指す教育実践のあり方を言語化し、自分の活動を構想し、教室内外の社会を作っていくことは、教師の協働と自立につながる。筆者は、教室活動や「教室文化」（Mehan、1979；Cazden、2001）[1]を、変わらぬ固定的なものとしてではなく、動的で可変的な現象―様々な人工物（コール、2002）に媒介されたシステムの中で、教室参加者たちが相互行為、相互作用する過程で浮き上がる、動的・関係的な現象―として捉えている。また、教室活動作りや「教室文化」作りを、自分の教育理念や教育目的のもと、それぞれの現場の状況や学習者に応じて活動を設計し、活動参加者による自立的で協働的な表現活動を支援すること―それぞれの教室の教育目標に向けて、教室内に人工物を（再）配置し、参加者たちによる人や人工物との相互作用・相互行為（図 1）を支援する不断の営み―であると考えている（塩谷、2008）。

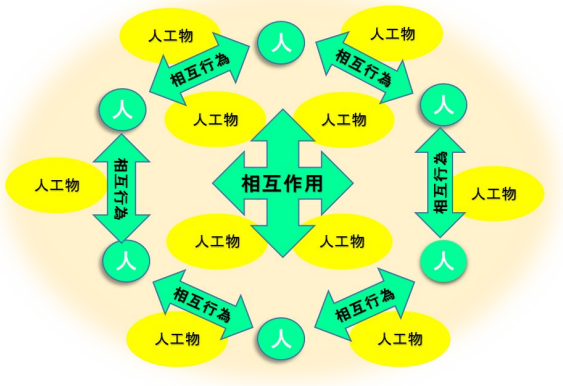

図 1

教育現場では、自分の好きなことをそのまま実行できるわけではないし、自分の教育理念をそっくりそのまま実践に移せるわけでもない。しかし、そのような現場で、たとえ

[1]「IRE 連鎖（IRE sequence）」等の教導的で不均等な談話構造や権力構造や役割構造等の教室に特有な文化。意識的に変えないかぎり教室で自然と立ち上がる「デフォルト・オプション」とされる。

教室に自分の思い通りにならない要素や障害があっても、「教室は変わらない」と放棄するのではなく、教育目標を現場での他者との対話や内省によって調整したり、教育目標に向けて人工物を配置、再配置したり、活動参加者たちとの関わり方や相互行為の行い方を変えたりしながら、クラスを作り、変えていくことができるはずである。そして、そうした過程で、教師の教育目標や教育理念自体が見直されたり、更新されたりすることもある。

教師は、巷に出回っている他者の実践や理論（商品）をそのままコピーし、何も考えずに実行（消費）する存在ではない。教室活動を人工物に媒介されたシステムとして捉え、他者との間でよく対話され吟味された教育理念や目的や方法のもと、教師が活動を自立的かつ協働的に作っていくことは、教師の自立にもつながる試みでもある。

（４）日本語教育界では様々な教員養成・研修が行われているが、教師達が自分の過去や現在や未来について考えつつ、自分の教育思想や教室実践についてグループで継続的に語り合い、語り直していく実践は少ない。教師が自分の教育観や教育実践について他者に向かって説明できることは、自分の教育実践を自立的に構築していくことや他の教師と互いの教育観について対話し、相互承認しながら共に実践や社会を作っていく協働にもつながる。そうした対話過程を教育実践の中でも経験し、そうした姿勢を身につけることが、学習者のみならず、教師にとっても必要かつ意味があるということは言うまでもない。教師にこそ、自分が身を置くそれぞれの環境・社会の中で、他者との間で対話を起こし、互いの考えの同異を確認し合い、それらを承認し合った上で、他者と共に教室を作り、職場環境を作り、社会作りを行っていく力が必要である。そして、そのような教師間の姿勢や力は、教師の自立と協働に繋がり、更に、それはまた学習者との対話、ひいては、学習者の自立と協働にもつながっていくものである。

＜引用文献＞

①塩谷奈緒子、明石書店、教室文化と日本語教育－学習者と作る対話の教室と教師の役割、2015
②佐藤学、教室という政治空間（教育の中の政治、世織書房）、1994
③竹田青嗣、ちくま新書、現象学は＜思考の原理＞である、1994
④佐藤学、学びの対話的実践へ（学びへの誘い、東京大学出版会）、1995
⑤Mehan,H., *Learning Lessons*. Cambridge, MA: Harvard University Press, 1979

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計３件）

①塩谷奈緒子、教室文化幻想に抗う－教育実から考える２（「一つの正解を求めない対話活動の意味ー「商品」として消費される言語教育のあり方に抗して」）、言語教育の商品化と消費を考えるシンポジウム　報告集 Kindle 版、査読無、2016、（ページ無）
②塩谷奈緒子、日本語教育観を語り、語り直し、語り合う「対話」の活動―教師の自立と協働を目指して」（「日本語教育における「対話」の意味と可能性―学習者と教師の「自立」の観点から」）ヨーロッパ日本語教育、査読無、No 20、2016、pp.83-89
③塩谷奈緒子、生きることを考える、生きる活動としての日本語教育実践研究－日本語教師間の対話を介した自立と協働に向けて」（「言語教育の目的と実践研究」）、言語文化教育研究、査読無、No 12、2014、pp.6-13、http://alce.jp/journal/dat/v12f.pdf

〔学会発表〕（計４件）

①塩谷奈緒子、実践研究は何をめざすか（パネル）、言語文化教育研究学会特別企画 IN 北京、2017 年 3 月 19 日、北京（中国）

②塩谷奈緒子、教室文化幻想に抗う―教育実践から考える 2（パネルセッション「一つの正解を求めない対話活動の意味ー「商品」として消費される言語教育のあり方に抗して」、言語教育の「商品化」と「消費」を考えるシンポジウム、2016 年 7 月 16 日、香港（中国）

③塩谷奈緒子、日本語教育観を語り、語り直し、語り合う「対話」の活動―教師の自立と協働を目指して」（パネル発表「日本語教育における「対話」の意味と可能性―学習者と教師の「自立」の観点から」）、第 19 回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム、2015 年 8 月 28 日、ボルドー（フランス）

④塩谷奈緒子、「生きることについて考える、生きる活動としての日本語教育実践研究」（シンポジウム「言語教育の目的と実践研究」）言語文化教育研究会 2013 年度研究集会大会、2014 年 3 月 15 日、早稲田大学（早稲田、東京都）

〔その他〕

ホームページ等

shioya-naoko@main.jp

６．研究組織

研究代表者

塩谷奈緒子（SHIOYA, Naoko）
東京電機大学　理工学部　講師
研究者番号：１０４０９７６６